

「岩見沢の航空写真(2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所 研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

岩見沢市の北を流れる「幾春別川(いくしゅんべつがわ)」は、石狩川の支流の一つだ。「幾春別」は永田によれば、アイヌ語で「イ・クシ・ウン・ペツ」(その・むこうに・ある・川)の意味である。別(ペツ)そのものに「川」の意味があり、本来は「幾春別川」は誤りで、あえて漢字を充てるなら「幾春川」とすべきである。このようなアイヌ語由来の地名の「誤用」は数限りない。尚、幾春別を和訳した地名にすれば「向川」或いは「遠川」とでもなっただろう。しかし、これでは詩情豊かなアイヌ語の語感は失われる。

石狩川も「イ・シカリ・ペツ」(その・曲がった・川)の意味で、もともと蛇行が激しく、たびたび溢水・洪水を起こす川だった。しかし石狩川本流は、戦前から流路改善工事が盛んに行われ、人工的に捷水路(しょうすいろ)を造成し、流下能力の向上を図ってきた。現在の石狩川に、三日月湖(河跡湖)が多いのはその名残で、いわば人工的に作られた三日月湖である。



上図は、美唄市付近の現在の石狩川の航空写真である(国土地理院提供)。写真の右上が上流(旭川側)にあたる。現在の本流は、「直線」とは言えないものの、ますます「まっすぐに」流れていることがわかる。しかし周囲に残る河跡湖は、捷水路造成前の、すさまじい蛇行ぶりを物語っている。「三日月湖」というよりは「Ω(オメガ)湖」と呼んだほうが良いようなものもある。石狩川本流が、このように激しく蛇行して

いたのは、極めて平坦な土地を流れていたからだ。旭川の標高は約100m、石狩川河口までは100km以上あるので、1km流れても、わずか1mしか流下しない計算だ。流路は必然的に激しく蛇行していたのだ。



石狩川本流が、戦前から流路改善の工事が行われ、流下能力の改善がなされていたのに比べ、支流の幾春別川は戦後になっても、蛇行はほとんど改善されていなかった。航空写真の一部を拡大してみると、自然に三日月湖ができたと思われるものもあるが、多くの蛇行はそのままだ。上の写真では、一カ所、人工的に流路を変更したと思われる箇所も見える。



岩見沢駅の北側にも、大きな蛇行部が存在した。幾春別川の本流から、大きく南に蛇行し、線路ぎりぎりにまで川が迫っていたのだ。恐らくこの蛇行部はたびたび氾濫して、鉄道の運行にも支障が出ていたに違いない。その結果、幾春別川では初の、大規模な流路変更が行われている。上の1948年(昭和23年)の米軍が撮影した航空写真は、流路変更工事の直後と見られ、線路の北側にまだ河跡湖が残っている。この河跡湖は現在は消滅し、住宅地の一部になっている。